



古代のうえの

上野遺跡

飯山市埋蔵文化財調査報告 第26集

1991. 6

飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会

教育長 岩崎彌

飯山盆地の中央を悠々と流れる千曲川は、太古の時代より多くの恵みをわたくしたちに与えてくれています。とくに常盤地区上野・大倉崎丘陵や瑞穂関沢地区周辺の千曲川河岸には数多くの遺跡が存在し、往時より千曲川との密接な関係が想像されるところです。

昭和63年および平成元年実施された国道117号線小沼・湯滝バイパス建設に伴う発掘調査では、旧石器時代～中世館跡まで連綿として生活が営まれた痕跡が、瑞穂・常盤両地区で発見されました。ことに常盤上野地区では約12,000年前以上から500年前までの、大規模な集落が断続的に営まれたことが判明いたしました。まさに遺跡の宝庫といえる場所であります。

このたび、バイパス敷設に伴う市道7-335号線改良工事が計画され、事前の緊急調査を実施することになりました。調査にあたっては、高橋桂調査団長をはじめ地元上野区・地権者の多大な御協力をいただき、また、多くの作業員の方に参加いただき実施することができました。

ここに初期の目的を達成することができ、御協力いただいた多くの皆様に感謝申し上げるとともに、本報告書が多くの市民の皆様に読まれ、郷土を知る資料となることを念願し序といたします。

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字常盤字道上3518-1～字林下3565-1番地に所在する上野遺跡の発掘調査報告書です。
- 2 発掘調査は、市道7-335号線改良工事に先立つ緊急発掘調査で、工事によって消滅する遺跡のデータを記録にとどめ、後世に記録で保存するとともに文化財の活用を計る目的で行われました。
- 3 調査は飯山市（建設課担当）より依頼を受けた飯山市教育委員会が、平成2年6月28日～7月11日まで実施しました。
- 4 調査に係る組織・関係者は裏表紙に掲載しました。
- 5 上野遺跡は、平成元年に大規模な調査が行われ、旧石器時代（約12,000年以前）～平安時代（約1,000年前）までの各時代のムラのあとが発見されています。今回の調査は、それに接続する道路部分の調査で、大部分が破壊されていたために発見された遺構・遺物はわずかでした。今回の調査で発見された主な遺構・遺物は以下のとおりです。

旧石器時代	ナイフ形石器・石核
弥生時代	掘立柱建物
平安時代	竪穴住居

- 6 本書は、一般の方に御覧頂くように努めて平易な文章にしました。
- 7 本書の作成は、土器拓影・実測は桃井伊都子が、遺物写真は田村、その他は望月が行いました。
- 8 執筆・編集は市教育委員会事務局が行いました。

上野遺跡の発掘調査

1. 上野遺跡の概要

上野遺跡は、飯山市大字常盤字外和柳を中心として存在しています。古くから遺跡の存在が知られており、『村史ときわ』でも紹介されています。しかし、山林が多く正式な発掘調査が行われなかつたこともあって、上野地区のどこからどこまでが遺跡なのか判然としていませんでした。昭和63年、国道117号線小沼・湯滝バイパス建設にともない、古くより中世館跡として知られていた大倉崎館跡を調査したところ、壮大な外濠や土壘、輸入陶磁器など超一級の資料を発見することができました。また、平成元年の調査では上野丘陵を縦断するように道路幅を調査しましたが、全面から旧石器時代の玉髓製搔器や弥生・古墳・平安各時代の集落跡が発見されました。このことによって、上野丘陵全体が遺跡であることが判明し、しかも飯山市内でも特に貴重な遺跡であることが指摘されました。

平成2年、市（建設課）は上野地区内のバイパスに接続する市道7-335号線の改良工事を計画し、事前の発掘調査を市の教育委員会に依頼してきました。工事箇所は、現道を拡幅して舗装するもので、すでに多くが破壊されているものと考えられました。しかし、もし残っていた場合、この工事によって地下に埋蔵されている貴重な文化遺産が完全に破壊される懸念があるため、事前に調査し、記録で後世に伝えようとして、発掘調査が行われることになりました。

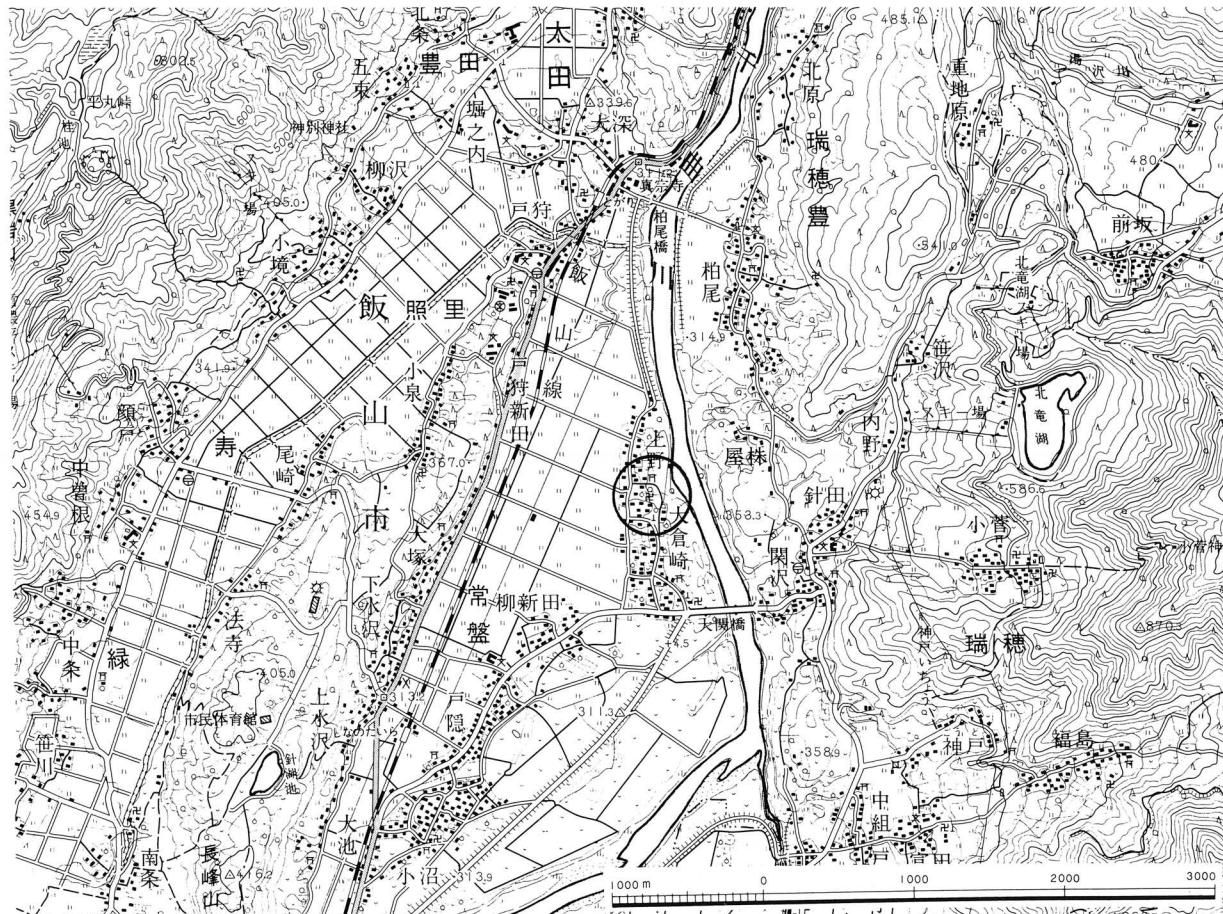
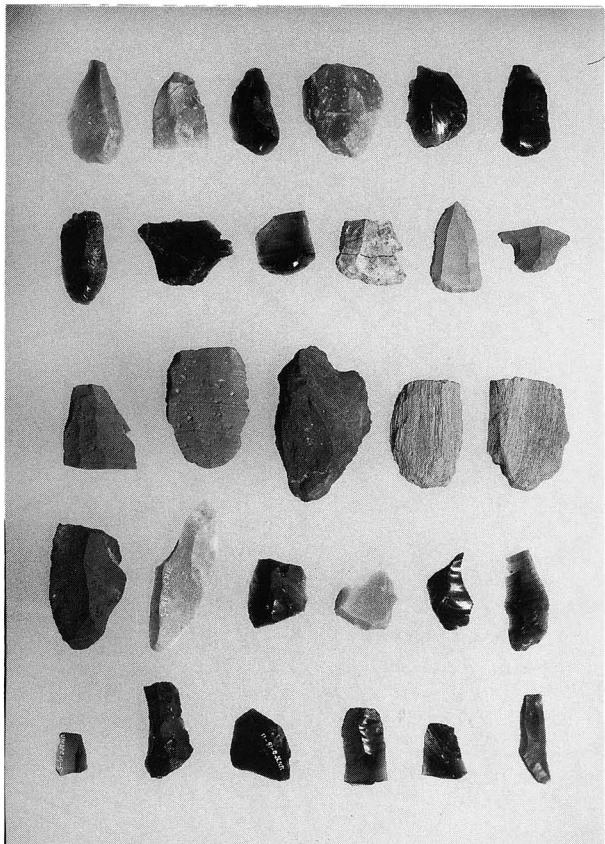
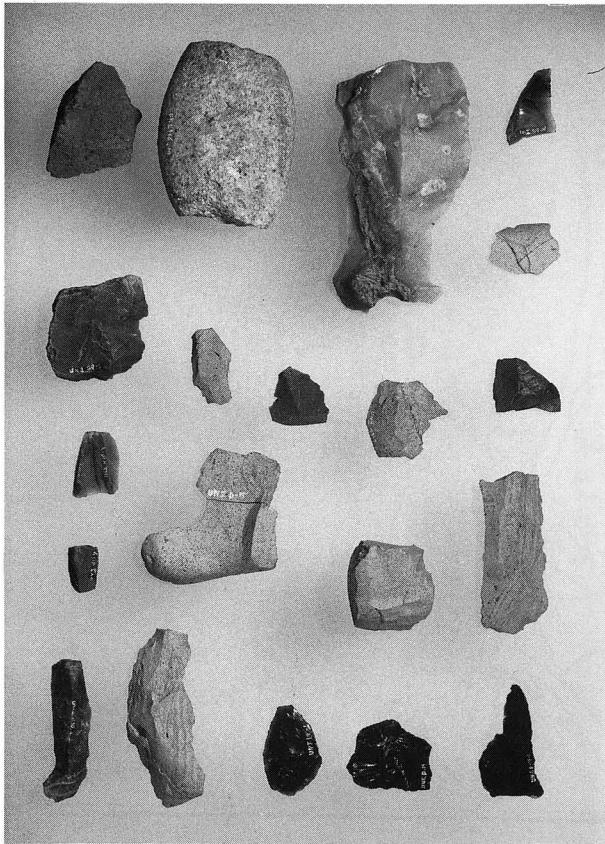
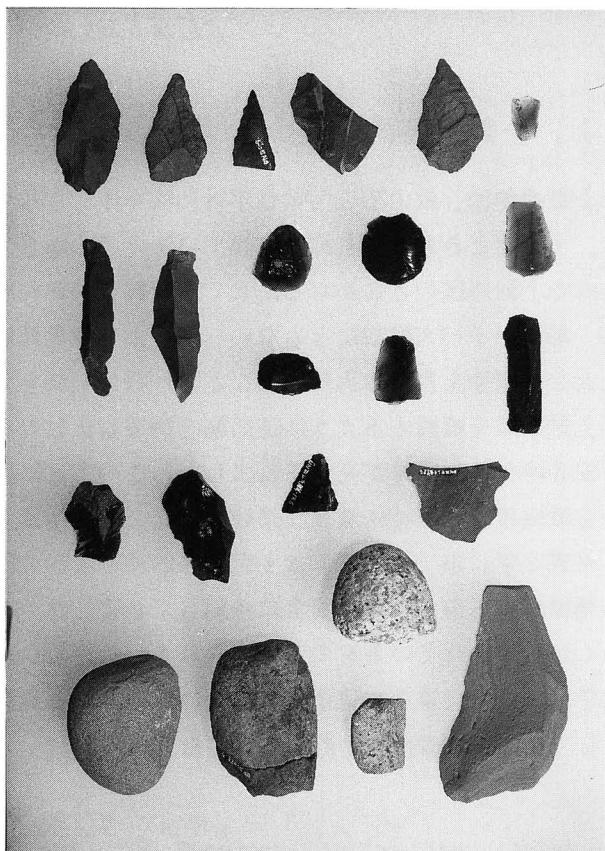
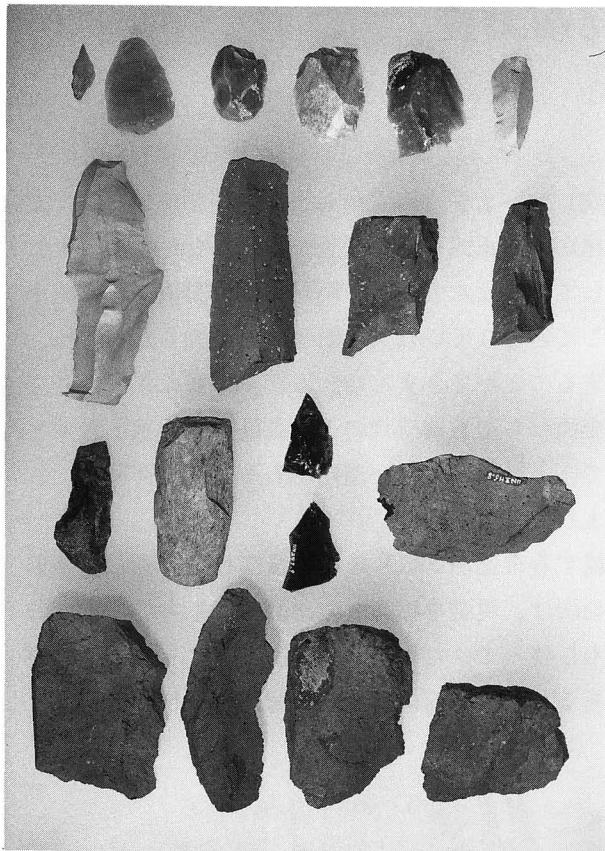


図1 上野遺跡の位置 (1:50,000)

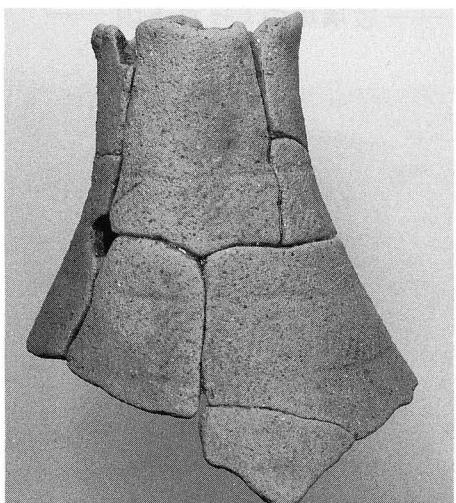
概出資料

—ハンターたちの道具—

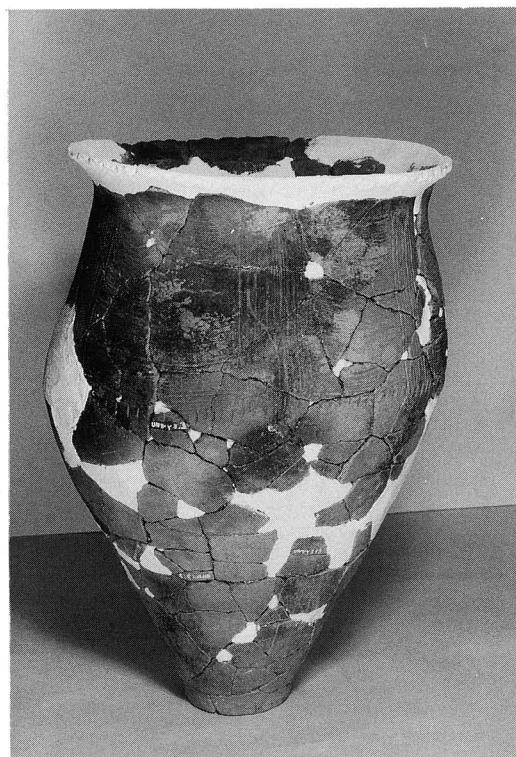


旧石器時代の石器（1989年調査） 約12,000年前(左上ナイフ2.9cm)

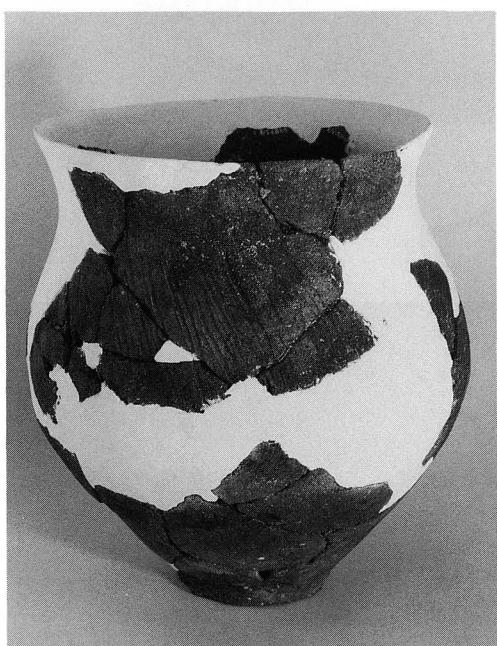
——初期農民の土器——



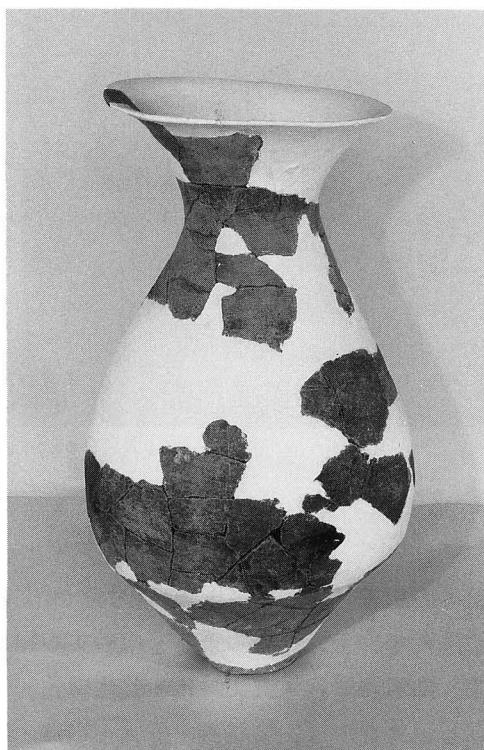
壺（約2,000年前）



壺（約2,000年前） 器高32cm



壺（約2,000年前）



赤い壺（約1,700年前） 器高58cm



壺（約2,000年前）

弥生時代の土器

——古墳がつくられる頃——



つぼ
壺 (約1,650年前)



つぼ
壺



かめ
甕



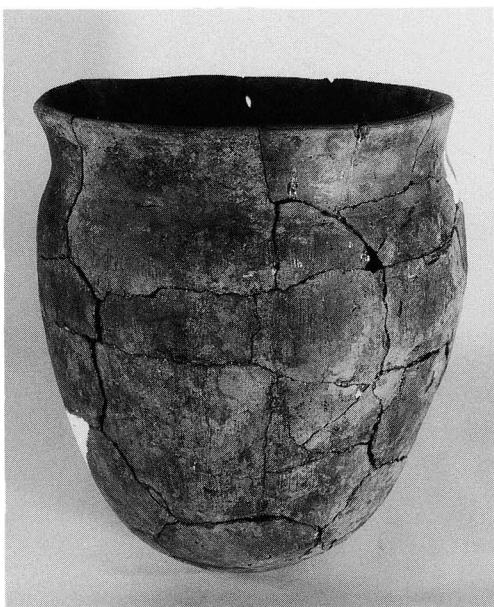
はち
鉢

過去の調査（1989年 国道117号線小沼・湯滝バイパス建設に伴う調査）

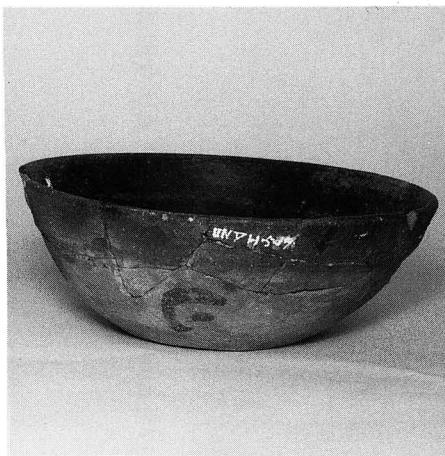
平成元年、上野地区の東側を縦断する幅15m、延長500mのバイパス路線の調査を実施しました。その結果、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の家や土器・石器など多数出土しました。

旧石器時代では、尖頭器・搔器・彫器・磨製石斧など約160点が出土し、そのほかにも厨房跡と考えられている礫群2か所を検出しました。搔器は玉髓と呼ばれる石を好んで用いており、一部は和田岬産の黒曜石が使われています。土器を未だ知らない人々の道具箱がほぼ完全なセットで発見された意義は大きいものがあります。縄文時代は断片的な発見で終っています。前期（約6000年前）の土器、および落とし穴

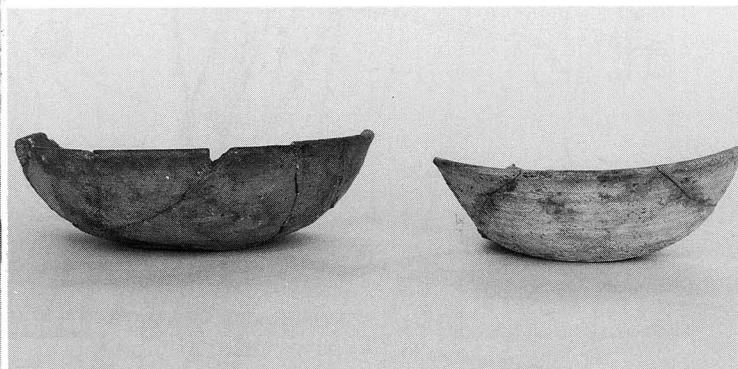
——平安庶民の土器——



かめ
甕（約1,100年前）



つき
坏（墨書土器）



つき
黒色土器坏（内面が黒色処理されている）

と考えられるTピットがこの時代と思われます。弥生時代（2000～1700年前）になりますと、この地区に明確な集落が現われます。竪穴住居が8軒発見され、一時期2～3軒で生活していたようです。この地区に初期稻作を始めた弥生時代の集落が発見された事実は、常盤平の一部が既に水稻耕作地として開発されたことを示しています。つづいて古墳時代の初期は、竪穴住居や方形周溝墓と呼ばれる墓が多く発見されました。道路幅の調査でしたので全体は不明ですが、方形周溝墓の存在は、かなり大きな集落を形成しそれを統治した権力者が居たことが推定されます。やや時期をおいて約1,100年前の平安時代中期には、8軒の竪穴住居が発見されています。正に地方の庶民の村が明らかになったわけで、この後中世に入ると、当地区は豪族の館が造られるように、飯山盆地の主要拠点として戦乱の渦に巻き込まれてゆきます。

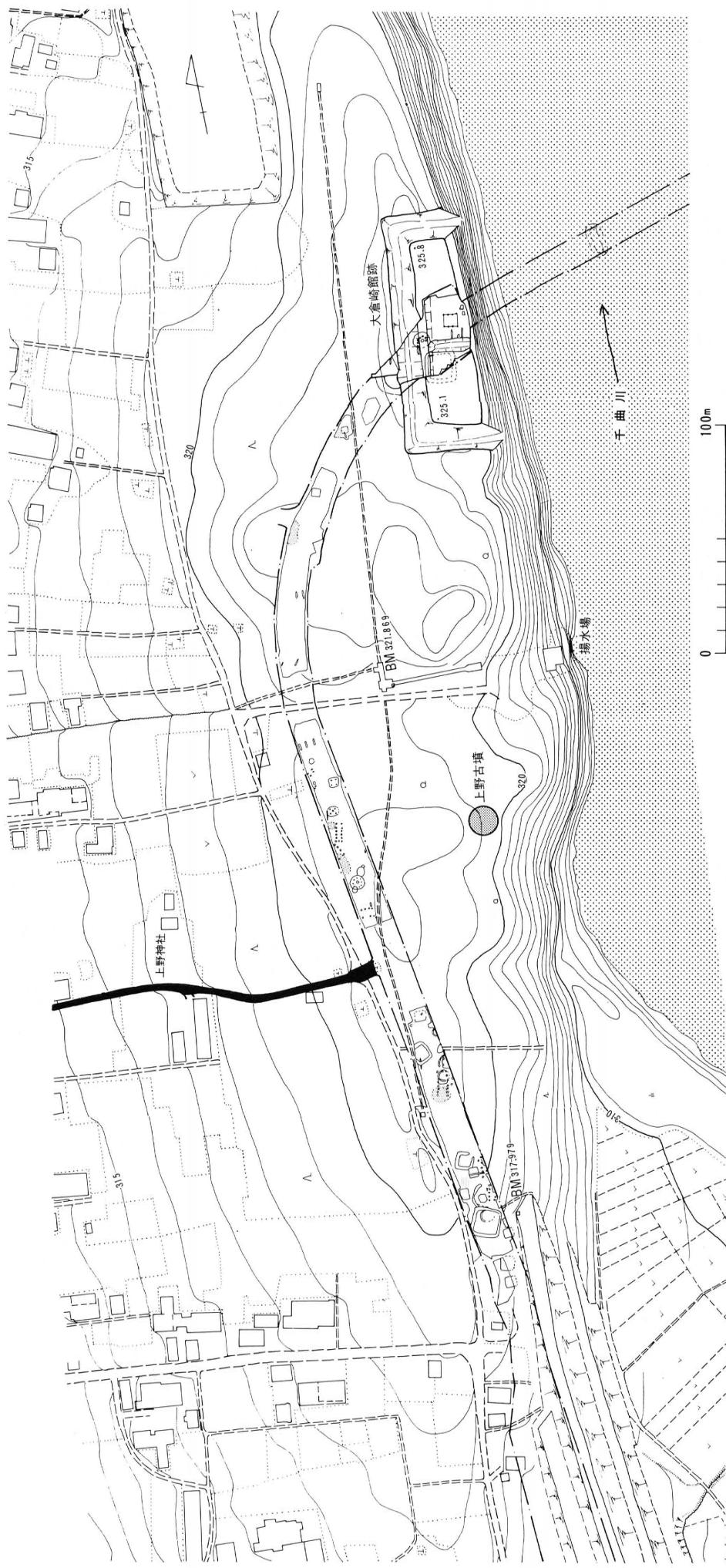


図2 国道117号線バイパス路線調査区及び今回調査区(黒塗り部分)

2. 経過と調査

調査は、平成2年6月28日～7月11日まで行われました。

道路延長区間は約180mで、幅員は6.5mが計画されていました。市道7-128号線より約90mは、幅員2mの簡易舗装がされており（I区）、調査は拡幅員部分の調査結果によって判断することとし、とりあえず調査は行わないこととしました。また、それより東側の部分（II区）は、砂利道であり遺構が残されている可能性があるため、全面を対象として調査を実施することとしました。

調査は、市内2か所で大規模な発掘調査が行われているなかで、3か所目の遺跡ということで行われることになりました。人員不足もあり、急遽小泉遺跡群を調査中の作業員の方に移動していただき、さらに地元上野区の方々にも参加頂き進めることにしました。

調査は、道路工事用の基本杭を使用し2mグリットで行い、ほぼ半ばより右に曲がるために、それぞれの変換点のポイントを使用して設定しました。番号はI区とII区を通して付すことになりました。

I区の調査

重機により表土を除去し、ショレンで注意深く調査しましたが、攪乱されている部分が多く、ほとんど遺構・遺物は発見されませんでした。B-5区で発見された遺構（H13住）は破壊されているためにはっきりとしませんでしたが、土師器が発見されたために平安時代の竪穴住居であると考えられました。約半分以上が道路敷でありましたが、道路建設によって全て破壊されていると認められましたので調査は行いませんでした。また、そのほかにも柱穴等が発見されましたが、建物になる配列になっておらず時期も不明でした。以上のことから、この区域には平安時代の集落の一部があったと考えられます、工事範囲内においては大部分が破壊されていたと結論付けられます。

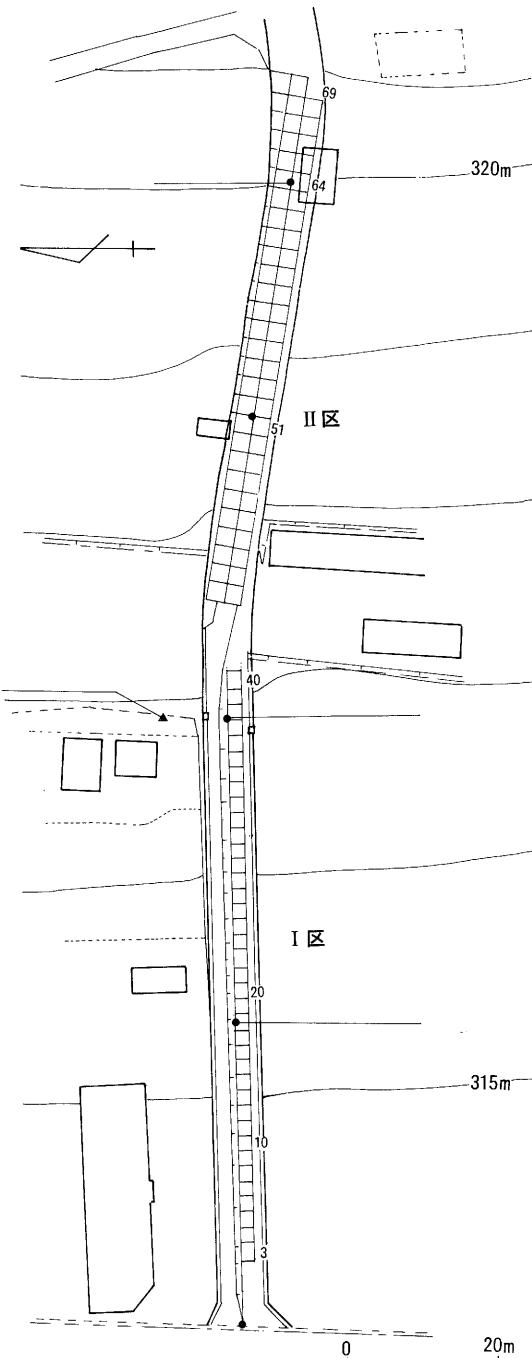


図3 調査区及びグリッド設定図

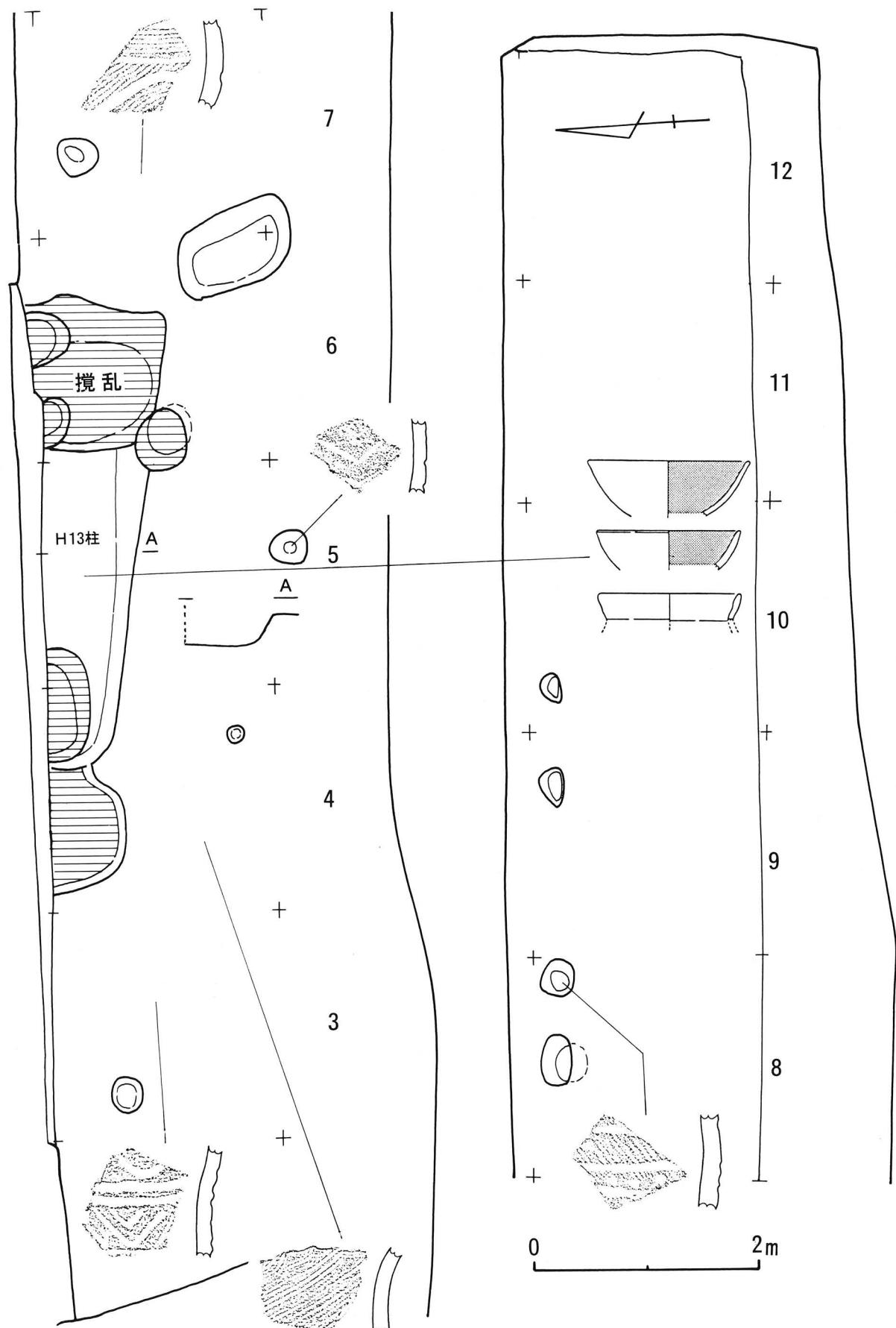
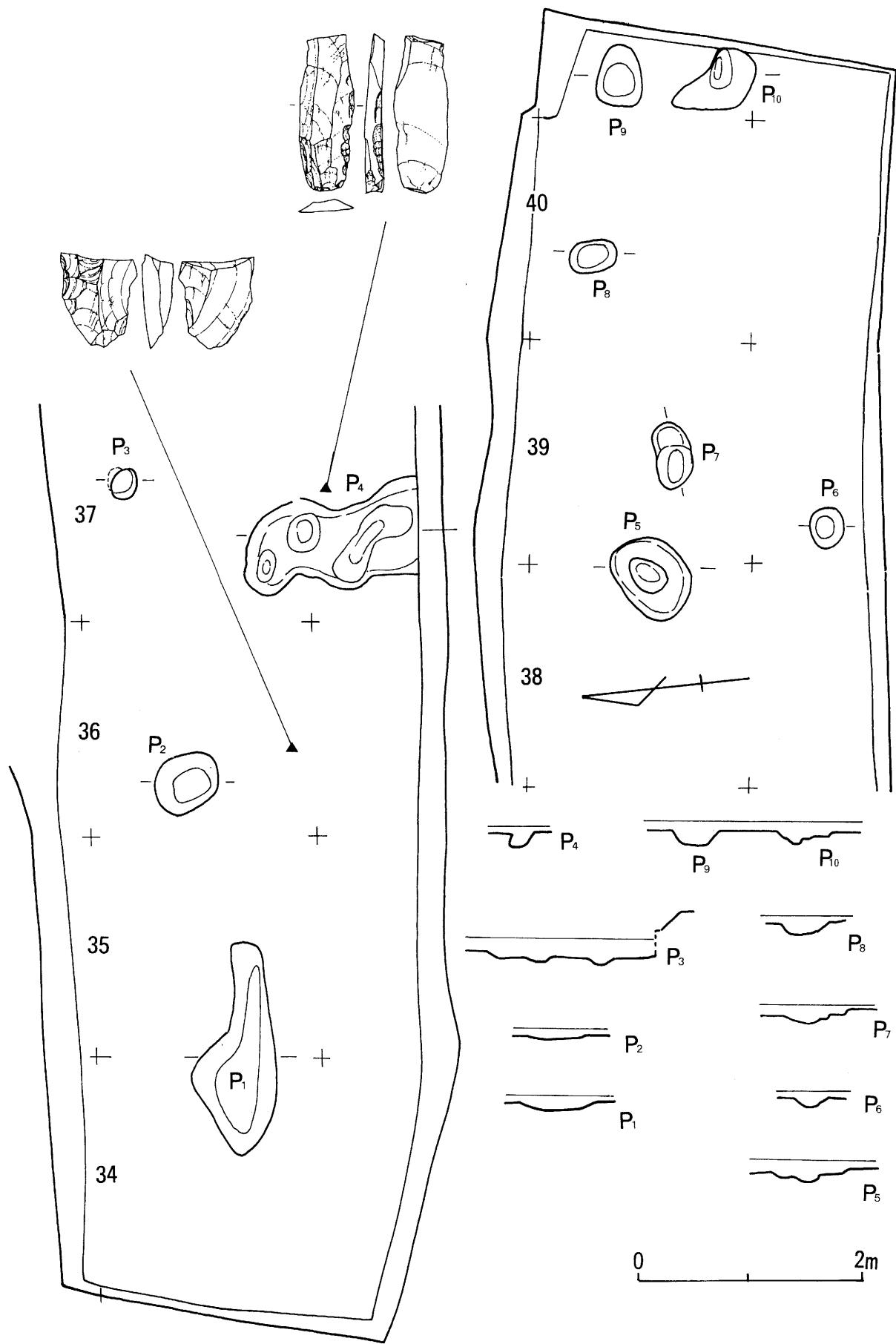


図4 I区遺構分布図1 (1:50)



I区 遺構分布図 2 (1:50)



I 区の調査

◀調査区より西側を望む

(上野遺跡の西側には常盤平が広がる。ここに住む人々は、長い時間をかけて、常盤平を徐々に開拓していったのだろう。)

調査区東側を望む

(狭い範囲の調査で、しかも大部分が破壊されていたが、先住民の大地に刻んだ跡と残した物はわずかながら残っていた。)





▲ I 区 3～12
(平安時代の竪穴住居の一部が発見されたが、すでに大部分が破壊されていた)



◀ I 区
(柱穴など検出される。時期不明。)

II 区の調査

II区は、上野神社から東側で、道路が舗装されていない地区です。ただし、上野揚水にかかる工事で大型機械で転圧ないし基礎工事を行ったことがあると言われていました。このため、工事が地下のどのあたりまで及んでいるかによって遺跡が残されているのか、既に破壊されているのか確認する必要がありました。バックホーで道路敷き部分を剥いで調査を行った結果、かなり工事によって破壊されていましたが、いくつかの遺構や遺物が発見されました。時代別では、遺構は確認されませんでしたが旧石器時代の石器を作るためのもとの親石（石核）が発見されました。出土場所はバイパスに近いD-69区で、赤土層（褐色風化火山灰層）の上面から出土しました。赤土層上部の境界面が既にわずかながら削平されていることが観察されましたので、本来この石器は赤土層の中に埋まっていたものと考えられます。また、弥生時代の掘立柱建物が1棟検出されました。掘立柱建物とは、この時代の一般的な家である竪穴住居に対して、柱穴を掘っただけの高床式の建物と推定され、多くは倉庫と理解されています。しかし、前回の調査でも多く出土しており、柱穴も浅く簡単なものであることから作業小屋的な施設である可能性が高いと考えられます。柱穴の一つから弥生時代中期の土器片がまとまって発見されたので、弥生時代のものと考えてほぼ間違いないでしょう。

なお、その他からも弥生時代の土器片が散在的に発見され、平安時代の遺物は発見されませんでした。したがって、この地区は主に弥生時代の生活空間であったと推定されます。



▲ II区の調査前現況



▲II区の調査（道路敷の固い土を人力で剥ぎ取るのは容易でない。
すべて地元の方々によって調査が進められてゆく）



▲石核出土状態（12,000年以上の眠りからさめた黒曜石）

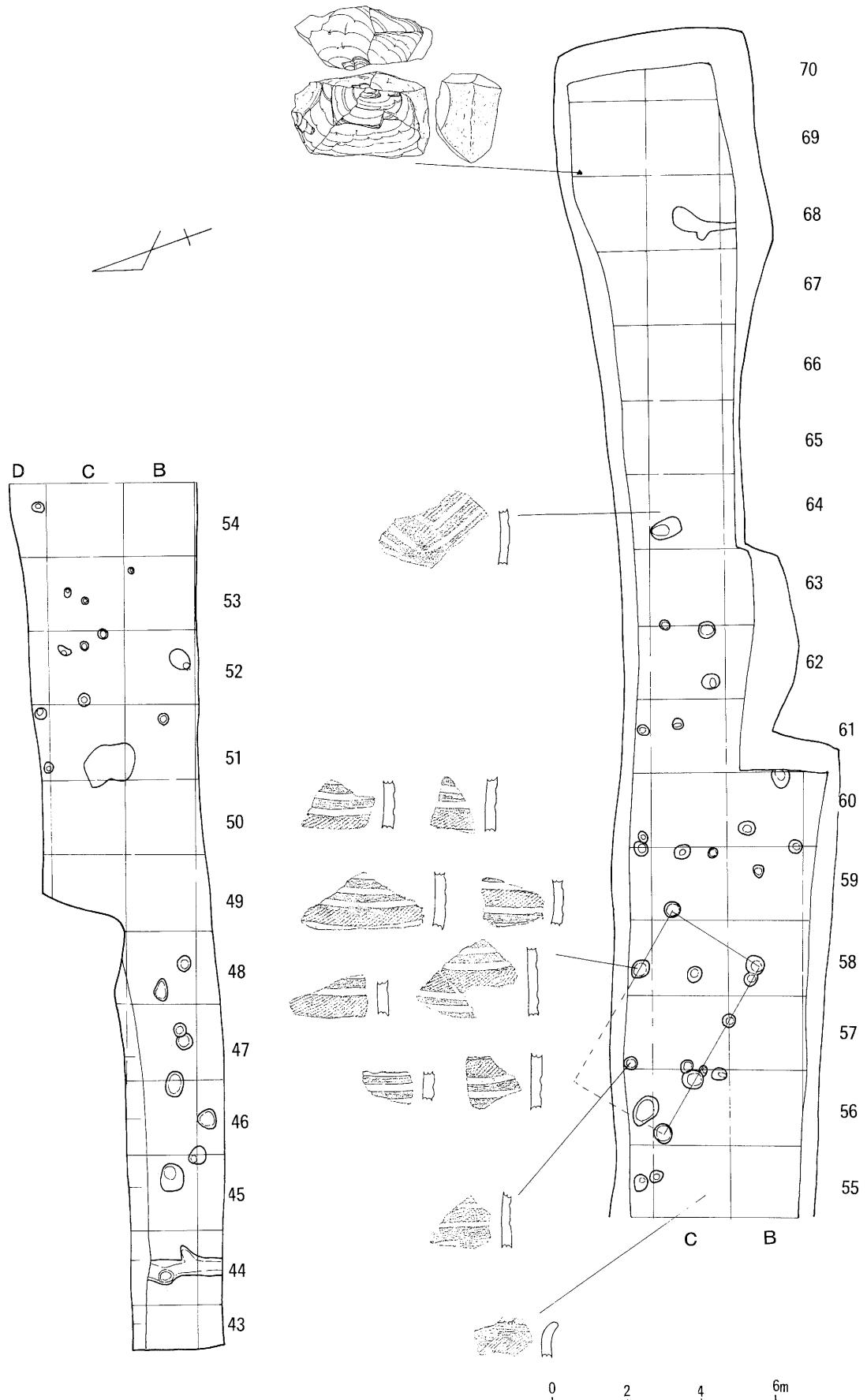
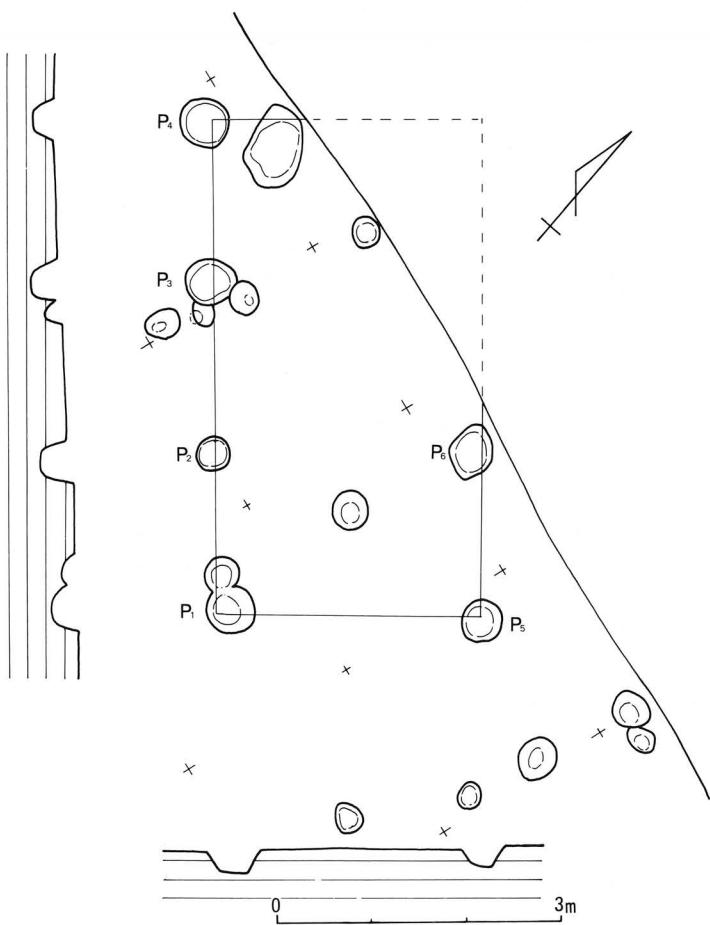
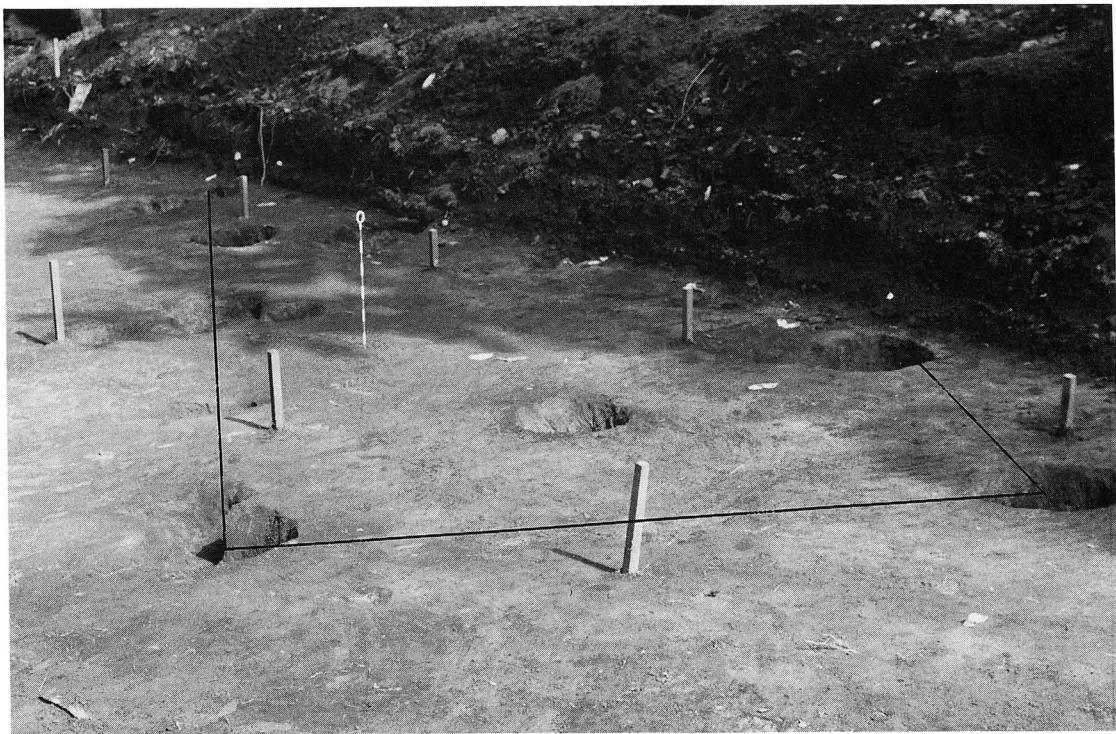


図6 II区 遺構・遺物分布図 (1:160)



掘立柱建物 (SB 9)

3間×1間で、桁行は5m 20cm、梁行は2m 70cmあります。柱間隔は、桁行 1m 68cm、梁行は 2m 70cmです。一部が調査区外でしたが、特別に庇等の施設は認められません。柱の深さは、確認面から約30cmです。

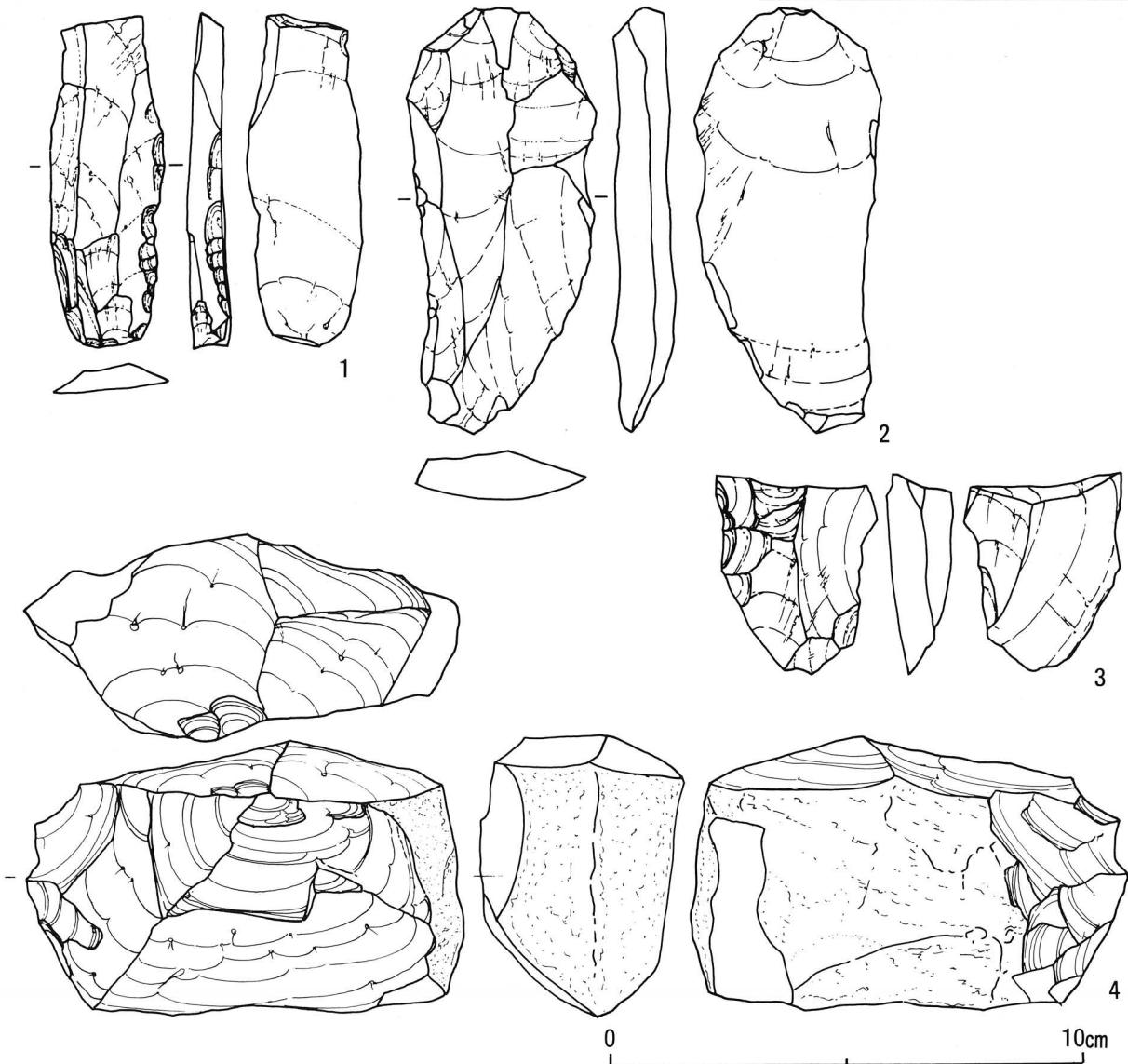
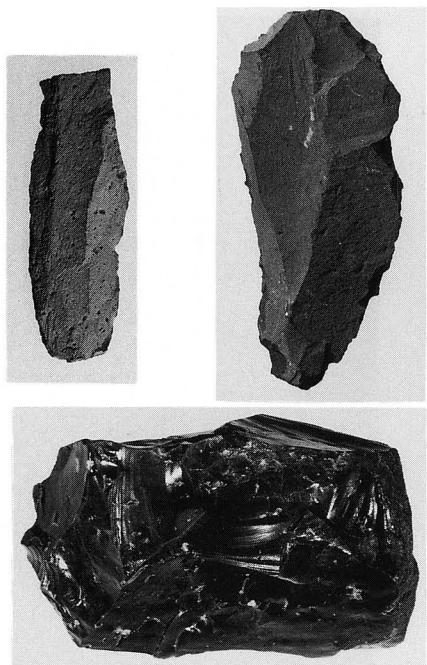
図7 掘立柱建物 (SB 9) (1:80)

出土遺物

発見された遺物には、旧石器時代石器、弥生時代土器、平安時代土器があります。いずれも単独あるいは破片で出土したため、形態が分かることは少ないですが、それぞれの時代に生活していた痕跡が明らかになりました。

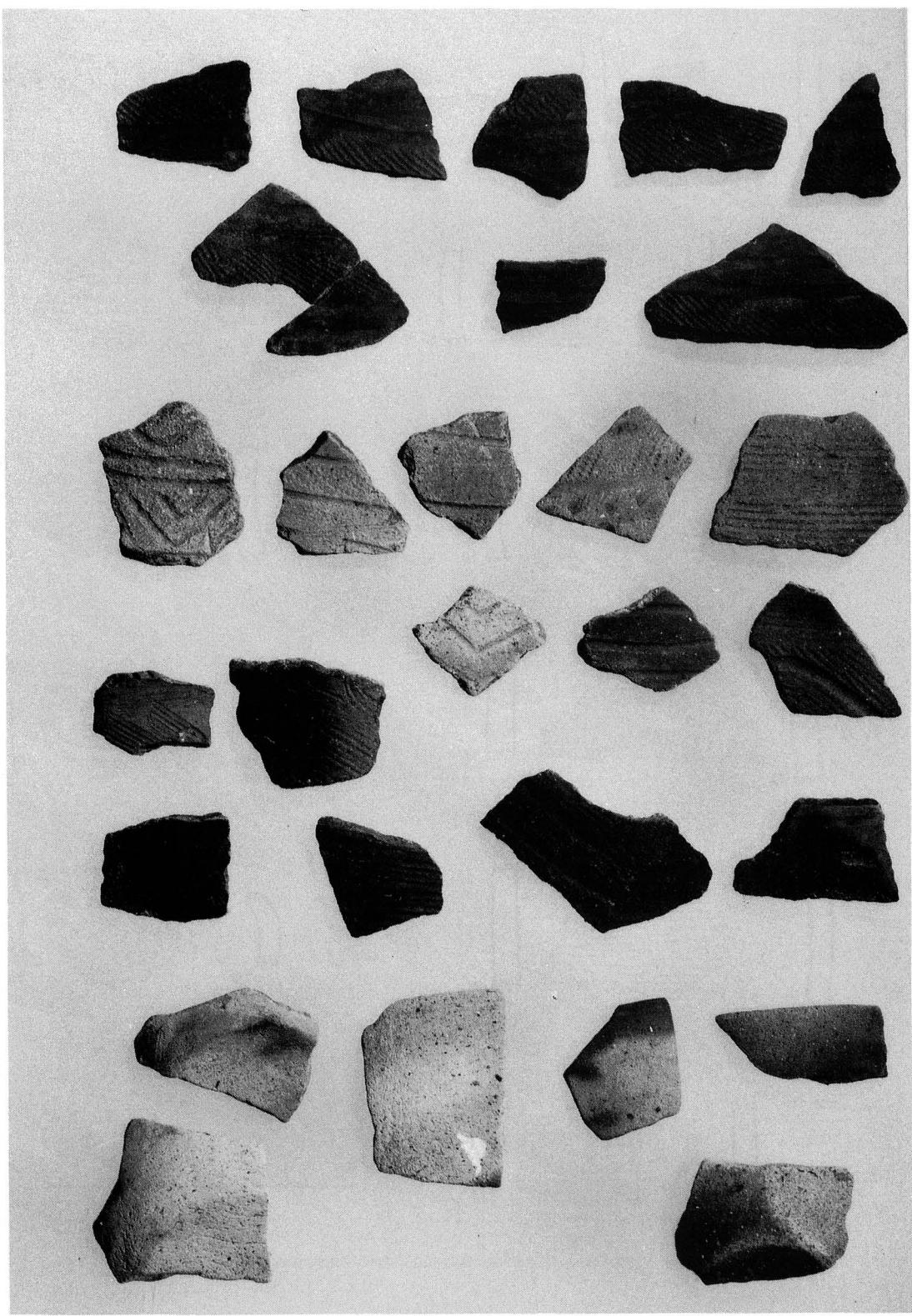
旧石器時代の石器（図8）

4点出土しています。1は地元に存在する安山岩を使用したナイフ形石器で、先端部が欠損しています。現存長は7cmで、中型であるといえます。基部側の両側に細かな調整剝離を加え刃潰し加工を施しています。打面は石核から剝離した面をそのまま残しています。



▲旧石器時代石器

図8 旧石器時代石器実測図（2：3）



▲弥生・平安時代の土器

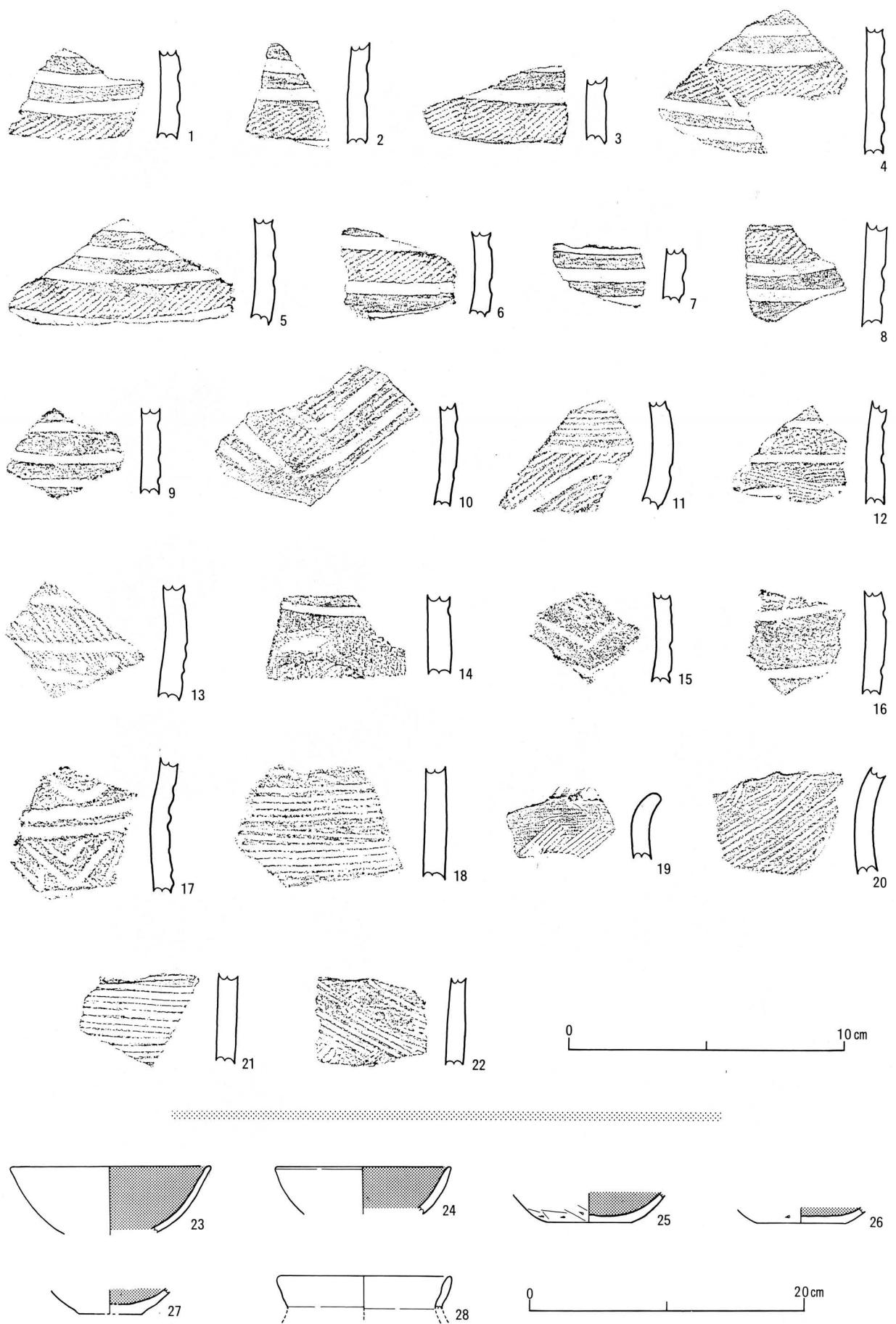


図9 弥生時代土器拓影図・平安時代土器実測図（1：2, 1：4）

2は安山岩を使用した縦長の剝片です。新しい欠損部が認められますが、二次加工を施した形跡はありません。調整して石器にするもとの材料と考えられますが、この石器自体が利器として使用されたとも考えられます。

3は、正面左側に二次加工がありますので、モノを削ったりする削器と考えられます。横長の不定型な剝片を使用しています。安山岩製。

4は、石器を作り出すための母岩で石核です。拳大のやや茶色を呈した黒曜石製で、打面（図上部）も作出されています。正面の剝離面を観察するかぎり、横長の剝片を数枚剥離したのみで、目的にあったような剝片は採れなかつたように思われます。

弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては土器のみです。後世の攪乱を受けた場所のためにすべて小片で、原形を推定できるような資料もありません。ただし、弥生時代の土器は、土器の表面につけられた文様で時代や原形がほぼ推定されています。したがって、完全な形で出土しなくともどんな形を呈していたか、弥生時代のどの時期のものかわかりります。大まかには、弥生時代の前半の土器には、前代の縄文時代の特徴である縄目文様が多く付けられています。

出土した土器は、掘立柱建物（S B 9）より出土した土器（図9・1～8）と各調査区から出土したものとがあります。掘立柱建物より出土した土器はすべて同一固体で、壺形土器の胴部中半から上部にかけてのものです。地文に縄文を付し、ヘラ状の工具で横位に平行な沈線をめぐらしています。沈線間は縄文を一条残しますが、他の間はきれいに磨消しています。なお、縄文帯の下の沈線部分のみ赤色塗彩されています。祭祀的行事に使用されたものであるかもしれません。

9は、1～8と同様な文様をもつものです。10～17は縄文地文にヘラ描沈線の重山形文（10）や、沈線間に刺突文を付したもの（13）があり、いずれも同じ時期の壺形土器の破片です。

18～22は、櫛描波状文を付した甕形土器の破片です。19は短く外反する甕の破片で、口唇部には刻み目が施されます。

以上の土器は、弥生時代の中期栗林式土器の特徴をよく備えており、ヘラ描沈線や刺突文が付される壺の存在および短く外反する甕の口唇部に刻み目が施される点は、栗林式土器でも比較的古い部分に位置付けられると考えられます。

平安時代の遺物（図9・23～28）

発見された遺物は土器で、すべて竪穴住居（H13住）から出土しています。

23～27は土師器の壺形土器で、内面が水漏れを防ぐために炭素を吸着させて黒く処理しているところから、特に黒色土器と呼んでいるものです。いずれも破片ですが、ほぼ全体の形態が推定されるように、今のがれのないお椀に似ています。25・26は底部が残っていますが、底部とその周辺にヘラで削った痕跡が認められます。これはロクロ糸切を行ったあと、手で持ちヘラ状の工具で糸切り痕を消し取った調整痕であると考えられます。28は、土師器の甕で、口縁部分のみが図上復元されたものです。土器が荒れていて調整痕はよく分かりません。

以上の土器は、土師器壺形土器の底部調整の方法から（ロクロ糸切り痕を残さない）、9世紀中半から後半に位置付けられるものと考えられます。

◆◆◆◆◆ 後 記 ◆◆◆◆◆

飯山盆地の中程に位置する上野遺跡は、東に大河千曲川が流れ、遺跡の立地する上野の丘陵を現在も削っています。中世城館跡として『村史ときわ』にも掲載されている大倉崎館跡もかなりの侵食を受け、千曲川の断崖に挾長な姿となって面影を伝えています。

この地区に国道117号線バイパスルートが計画され、昭和63年・平成元年の二ヵ年にわたって上野地区的発掘調査が行われました。このことの詳細については、国道117号線関係遺跡調査報告I・IIが発刊され、本書でも概要を紹介しておりますが、第一級の遺跡であることが判明しています。

今回の調査は、そのバイパスに接続する市道改良工事に伴うものでした。平成2年度は、飯山市において最も遺跡発掘の多い年度となりました。いずれも緊急を要した調査でありましたので、次年度へ繰り延べることができず、結局調査団諸氏に大きな負担が掛かったことは否めません。ことに上野遺跡の発掘調査は、国営飯山開拓事業に伴う大規模調査、長峰工業団地造成に伴う大規模調査の継続中に行わざるえない状況のなかで実施することとなりました。そのため、準備もほとんど出来ず場当たり的な調査となってしまいました。本書にそうした原因による不備が随所に現われる結果になってしまったことも、反省として銘記したいと思います。

発掘調査では、小林上野区長はじめ多くの方の御協力をいただきました。とくに発掘調査に直接関わっていただいた方々には、期間の余裕のないなかで、かなりの重労働を嫌な顔一つせずに頑張っていただきました。各位にお詫び傍々御礼申し上げたいと思います。

* * * * *

高速交通網の到来とともに飯山市でも開発の波が押し寄せ、埋蔵文化財を取り巻く情勢はいよいよ厳しさを増しています。同時に、市の活性化をはかるとともに市民の皆さんへの利便を考えるとき、両者の共存を図っていくのは困難なこともあります。本書は記録保存としての結果であり、そのかわり調査個所は地上から姿を消しました。その任を果たしたとはいえない報告書ではありますが、今後の埋蔵文化財保護を考える一助になれば幸いです。(望月)

原 始・古 代 年 表

年 代	時 代	特 色	上 野
200,000年前	旧～先 石土 器 器	○ 日本列島に人類渡来 ○ 局部磨製石斧の出現 ○ ナイフ形石器の発達 ○ 石槍の発達 ○ 細石刃の発達 ○ 大形石槍の発達	
30,000年前			■ 石器
12,000年前		○ 土器と弓矢の登場	
9,000年前	繩	○ 壁穴住居の出現 ○ 温暖な気候 ○ 集落の形成	
5,000年前		○ 繩文文化の最盛期	
3,000年前	文	○ 冷涼な気候 ○ 祭祀遺構の盛行	
2,100年前			
弥 生	前 期	○ 稲作・金属器の伝播	
	中 期	○ 稲作の定着	
	後 期	○ 鉄器の普及	■ 集
1,700年前	古 墳	○ 古墳の出現 ○ 須恵器の製作開始	
1,600年前		○ カマドの登場 ○ 群集古墳の形成	
710年	奈 良	○ 大化の改新	
794年	平 安	○ 平城京へ遷都	
1,192年		○ 律令制の動搖	
	前 期	○ 平安京へ遷都	
	中 期	○ 藤原氏の栄華	
	後 期	○ 源平の合戦	■ 集 落

飯山市遺跡調査会(平成2年度)

顧問 小野沢静夫 市長(平成2年9月14日退任)
小山邦武 市長(平成2年9月15日就任)

会長 佐藤春夫 教育委員会委員長

副会長 長谷川元一 社会教育委員長

委員 吉沢菊之進 文化財保護審議会会长(平成2年10月26日退任)
滝沢藤三郎 文化財保護審議会会长(平成2年11月2日就任)
藤沢賢一郎 議会総務文教委員長(平成2年12月11日退任)
丸山豊雄 議会総務文教委員長(平成2年12月12日就任)
中村敏 公民館長
高橋桂 日本考古学協会会員
山崎美都枝 教育委員会委員長職務代理
浦野昌夫 教育委員会教育長(平成2年12月24日退任)
岩崎彌 教育委員会教育長(平成2年12月26日就任)

事務局長 佐藤清 教育委員会教育次長

事務局次長 渡辺博 教育委員会社会教育係長

事務局員 堀内隆夫 教育委員会社会教育主事
望月静雄 教育委員会社会教育係
樋山二三子

調査団

団長 高橋桂 飯山北高等学校教諭
担当 望月静雄
調査員 常盤井智行
〃 田村滉城
〃 小林新治
〃 丸山三二
〃 常田利夫

作業参加者

大森信衛・樋山巖・梨元智年・清水隼人・竹内大五郎・小出まさ子・万場恭枝
富岡みゑ子・万場キヨノ・北条辰男・丸山光子・鈴木ため・桃井伊都子

協力者・機関

上野区(小林佑幸区長・中原英吉副区長)・中原道雄・稻崎實・小出宗司
市建設課